

「坂の上の雲」映像化への道

寄稿

NHK エンタープライズ シニア・エグゼクティブ・プロデューサー 西村 与志木

スペシャルドラマ「坂の上の雲」(NHK)は、構想、準備、撮影を含めると11年間という長い年月をかけた規格外のドラマであった。この作品でエグゼクティブ・プロデューサーとして制作の総指揮に当たった西村与志木氏に、放送に至るまでの思いを語っていただいた。

* * *

「どうして、この作品を映像化したいのかしら」と司馬遼太郎夫人である福田みどりさんは私に聞きました。2000年の秋、司馬さんの「菜の花の沖」をNHK放送開始75周年企画ドラマとして完成したお礼に、東大阪にある司馬さん宅を訪れた時のことです。

司馬さんがお亡くなりになってすでに三年の歳月が流れていました。みどりさんの問いに、私はこの小説を教員だった父が珍しく買ってきて、大学生時代に夢中で読



んだこと、70年代初頭の学園紛争に明け暮れていた自分に大きな示唆を与えてくれた作品であったこと、そしてその頃の自分と同じ世代の若い人たちにこの作品を読んで欲しいことなどを一気に話しました。そして、今の若い人はあまり本を読まなくなっているから、まずその映像を見せて興味を持ってもらってから小説を読んでもらうのがいいのではないかと必死で訴えかけたのです。みどりさんは優しく微笑みながら「そういう考え方もあるかもしれないわね」と答えました。開かずの扉がほんの少し開いて光が漏れてきた瞬間でした。それと同時に放送までの想像を絶するような険しい道のりのスタートとなった瞬間でもありました。

司馬さんが小説「坂の上の雲」を産経新聞夕刊に連載を開始したのは1968年、今から44年前のことです。それから4年3か月をかけて1972年に完結し、文芸春秋社から刊行されました。司馬さんはこの作品を書く前に5年の準備期間をかけています。そのスタートは40歳のとき、まさにこの作品の完成に10年間という40歳代のすべてをかけたのです。産経新聞に連載されていた頃から映画・テレビの各社の映像化・ドラマ化の申し込みが殺到しました。しかし司馬さんはその全てを断りました。その理由については二つのことが考えられます。一つはこの小説が当時、進歩的文化人といわれていたような左翼サイドから、国威発揚的であり好戦的な作品と批判されたことです。また右翼、さらには水交社や乃木神社からは乃木將軍を冒瀆する小説であると批判されました。この両サイドからの批判は、2012年という現代の視点から見ると極めて荒唐無稽なものと思われる。しかし司馬さんは「活

字」であれば自分の書いたものとして如何なる批判も受けるが、映像化されたものに対する批判に答えることは出来ないと考えたようです。さらに二つ目の理由として当時、司馬遼太郎作品は何作もNHKの大河ドラマでも映像化されていますが、この「坂の上の雲」で描かれた内容はそのレベルでは到底、再現することは出来ないとも思われたようです。いずれにせよ、この作品は長い間、映像化への道を封印されたままとなっていました。



スペシャルドラマ「坂の上の雲」は準備期間に6年、撮影と放送に5年、合わせて11年の歳月をかけて実現しました。ドイツ、韓国、日本などの最新VFX（特殊撮影）を駆使し、国内23都道府県、海外13か国のロケを敢行して空前のスケールで完成しました。

司馬さんが御存命であれば是非、見ていただきたい作品に仕上がったと秘かに思っております。



西村与志木さん（右）と、広瀬武夫役の藤本隆宏さん（左）と現場にて

西村 与志木 さん（にしむら・よしき）

NHK エンタープライズ シニア・エグゼクティブ・プロデューサー
76年NHK入局。ドラマ部で演出したドラマ作品でモンテカルロ国際テレビ祭ゴールデンニフ賞（グランプリ）、国際批評家賞受賞、文化庁芸術作品賞を受賞。
連続テレビ小説「湾つくし」、大河ドラマ「独眼流政宗」等を演出後、米ロサンゼルスに派遣され3年にわたり映画製作を学ぶ。その後、連続テレビ小説「かりん」、大河ドラマ「秀吉」のプロデューサーを経て、ドラマ部長を歴任。「坂の上の雲」のドラマ化を実現した功績により、第61回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。平成24年より現職。